

2023.5.11

とと道トレイル金浦＝走出ルート現状報告

By HK

By HK



先月に続きこの時期の金浦＝走出間のとと道現状を見て回りました。
連休を終えて春たけなわ。気持ちの良いトレイルでした。



午後で陽がやや西に傾いたせいか住吉神社の玉垣の刻字がくっきりと読めました。
出買連中



濱魚問屋



元魚問屋社中



とと道出発地点、新川河口の堂々たる久我邸です



橋の上から瀬戸内海への河口と山陽本線の鉄橋が見えます



新川は吉浜干拓地の水はけを良くするために干拓地完成後10年目にヒッタカを行う東西の山の間を新たに開鑿して1671年に造成されました。山を背に北へ向うと右手に吉浜干拓記念碑の置かれた須屋があります。





大河東橋の先で、高速道路の橋桁の耐震工事が進行中です。吉田川の土手道は工事用のトラック道と交叉していて、横断時には安全にご注意ください。



工事現場の先の助実への坂道手前にとと道看板がありますがどんどん伸びる雑草に覆われて今にも隠れそう。急坂は草におおわれて一筋のか細い道になっています。

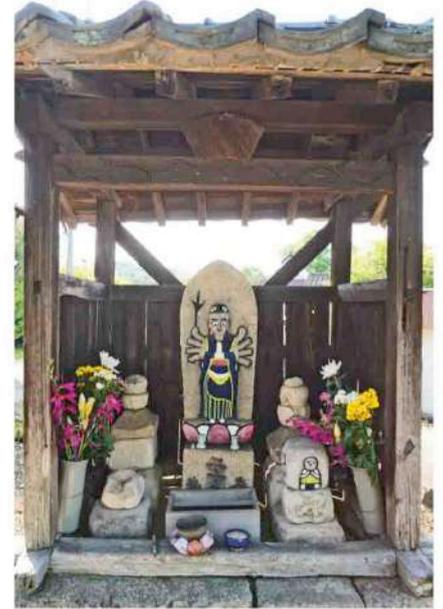


助実の丘の上に出ると畑が広がり草も刈られ、のどかな眺めが広がります。



丘の上からは北へ下り、最初の角を左へ曲がって助実に向かいます。その道標が抜かれて地面に置かれていました。沿道のブロックの穴に差し込んでおきましたが、改めて穴を掘り、埋め込む必要があります。





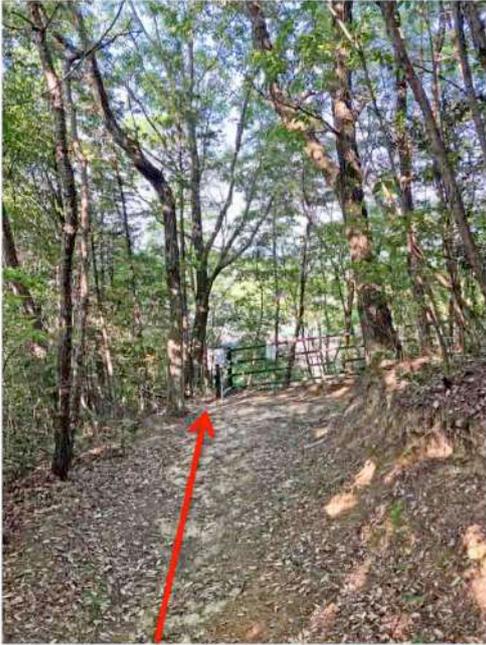
聖地の12神様の小さな祠に午後の光が差し込み、折り重なる屋根の縁と壁面が神々しく輝いていました。観音様はいつもどおりの明るい色彩をまとっておられました。



大持池の脇エスプワールへ向かう舗装道路は爽やかな新緑の散歩道状態。岩神様への道は道路工事中で進入禁止。ときわヴィレッジに入る手前で遠くに大山と思われる山が見えました。あまりに近い感じで自信がありませんが大山でしょうか？



ときわヴィレッジ前のとと道遺構には刈り取った笹が散乱していましたが歩くには問題ありません。ゆずり葉交流館は無人でしたが高原リゾートの様で爽やかでした。自動販売機でコーヒーをいただきリフレッシュしました。森の中では草は未だ芽が出た程度です。



とと道は「ふるさとの森遊歩道」となって続きますが1 kmほどで突然柵に遮られ、道は右に曲がります。下にある野球場を作るため山が削られ、とと道も山と共に消えたのです。そこで昨年の秋、市の許可を得て、柵の左側にわずかに残った山の斜面の踏み跡を歩ける様に整備し、とと道を復元しました。下り口は急なので気を付けてください。林を抜けると溝沿いに踏み跡がありスポーツ公園事務所前に出られます。協議会の笠岡メンバーの熱意でかつてのとと道の雰囲気復活しました。

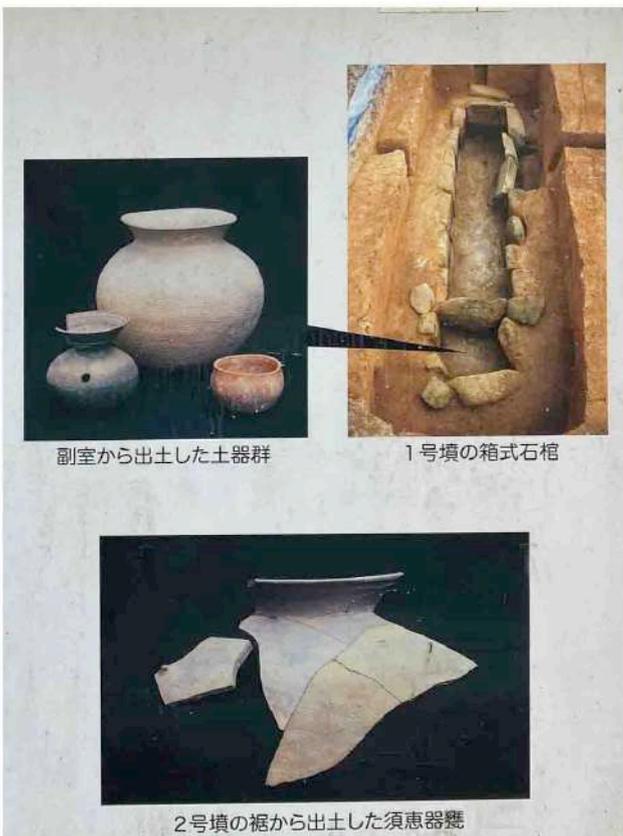




ききな峠には大きな古墳群が有るとのことで気になっていました。今回初めて現場に立ち寄りました。運動公園の吊り橋から南を眺めると田園地帯が広がり、奥に加入堂山が見えます。その向うは瀬戸内海です。



ちょうふくじうらやまこふんぐん
長福寺裏山古墳群
 【市指定史跡 昭和38年12月25日指定】
 笠岡市走出と山口地区の境界をなす標高90mほどの丘陵が、南西から北東へと伸びています。古墳群はこの尾根線上の約600mの区間に列をなして築かれており、前方後円墳、造出付の円墳、方墳、円墳で構成されています。
 これらの古墳は、出土遺物などから5世紀代に次々と築造されたものと考えられています。特に双塚古墳は備中西部で最大の古墳であり、吉備中核をやや離れたこの地域で、この時期、急速に台頭した勢力の存在がうかがわれます。
 出土品は笠岡市立郷土館に展示しています。
 笠岡市教育委員会



なな づか こ ふんぐん
七つ塚古墳群

所在地：笠岡市走出字木々名
 時期：5世紀前半

一辺 10mにも満たない小さな方墳 4 基が並んでいます。東端の 2 号墳は一辺約 8 m、高さ 1.5m で、1 号墳より先に築かれたものと思われます。内部主体は木棺で、墳丘の裾からは須恵器の壺と甕の破片が出土しています。

1 号墳は一辺約 9 m、高さ 1 m 弱で、内部主体は長さ 2.2m、幅約 0.5m の箱式石棺です。この箱式石棺には小さな副室がついており、その中には須恵器の壺と甕、土師器の椀が納められていました。また、主室からは刀・剣・鏃・斧・鉄先などの鉄器や、滑石製勾玉・白玉も出土しています。

3 号墳と 4 号墳は、1 号墳に先行して築かれたと思われるが、墳丘盛土がほとんど失われています。4 号墳の内部主体は木棺で、棺内からは鉄刀が出土しています。

七つ塚の方墳は、規模こそ小さいものの、出土した須恵器は朝鮮半島との関わりをうかがわせるものであり、古墳群の性格を考える上でも重要な意味を持っています。

副室から出土した土器群

1号墳の箱式石棺

2号墳の裾から出土した須恵器甕



峠から急な舗装道路を登ると5分ほどで森の中の平坦地に出ます。そこにゆるやかな起伏が4つならび、小さな方墳が7つ埋め込まれています。5世紀の墓で、埋葬品として朝鮮との関わりがあるといわれる須恵器や鉄器が出土しています。あの時代に須恵器がここまでどんな経路で運ばれて来たのか気になるところです。出雲からだとするとと道を経由して来たのでしょうか？



ききな峠から北へ下ると広大な甲弩（こうぬ）の田園地帯が広がります。平安時代、東の地頭である庄氏が、西の地頭である小田氏からこの豊かな地を奪いに侵入したことがあるそうです。小田川の手前にある折敷山は小田氏の本拠神戸山の属城でした。矢掛へ向けて一直線に続く道の両脇には豊かな水田地帯が続き、この地を巡って展開されたかつての戦乱が偲ばれます。今回は金浦から車と徒歩で2時間ほどの調査になりました。